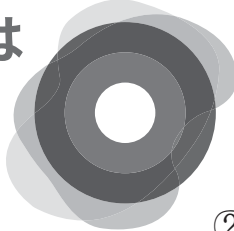


記事広告

がんは、先端技術の登場で仕事をしながらでも治療を受けられ、多くの場合社会復帰できる時代になった。しかし、そうでない場合があるのも現実だ。標準治療が効かない患者は多く、治療が効いても重い副作用や後遺症がつきまとう。セカンドオピニオンは定着しつつあるが、医師と患者の距離は本当に縮まったのだろうか。患者と医師の視点から未来の医療を考える。

未来の医療はすぐそこに

iCONMの挑戦



②

「日本は公的保険の医療が充実しており、良いことです。倒的に少ない。」

重要性増す「インフォームド・ディジション」



支えあう会「α」
野田 真由美 副理事長



東京女子医科大学
村垣 善浩 教授

がん医療、情報共有が課題

治療が進まない要因は医療制度のほかにも数多いが、がん患者団体「支えあう会α」副理事長の野田真由美さんは一因として「医療者間の情報共有」をあげる。医師や医療機関は治療を依頼する企業との守秘義務があるため、情報を発信しにくい。がん診断の医療機関が、治療実施機関でなければ治療の計画を知り得ない。医師間の情報格差が、限りある治療選択肢を患者につなげない背景がある。

「医師、患者間の対話を深める必要がある」と野田さん。がんを告知された患者が冷静に自身の医療に向き合うのは困難だ。医療機関は相談支援体制を充実し、多くのがん患者もサポートを広げるが、自身の関病経験も踏まえて野田さんは「がんは人の価値観や人生観を問う。治療を選ぶための自分なりの「ものさし」を持つことが必要」と強調する。



↑考える
↑医療について
↑シンポジウム参加受付中

「カルニース」と思いますが」と指摘する。しかし、実際は、患者みずから意思決定することは容易でなく、野田さんも「高度情報化時代なので、治療のリスクとベネフィットを自動解析し、気づかぬうちにその人にとって最適な治療でがんを治せるような時代が来てほしい」と話す。

村垣教授は「身体的、精神的な痛みのない超低侵襲医療を目指している」。川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター(iCONM)の中核プロジェクト「COINS」で村垣教授は、超音波感受性抗がん剤をスマートナノマシンに搭載してがん組織に集積させ、体外から集束超音波を照射してがん細胞を殺傷する治療法の実用化に挑んでいる。「寝ている間に治療が終わっているくらいが一番良い。アンメット・メディカルニースを満たせるように、われわれは日々努力を続けま